

# 連載コラム



## みずき野と その周辺の 植物と昆虫



### 第 60 回 シソ科の植物 (1) 野生種



もとよし ふさお  
本吉 総男

2021 年 1 月

シソ科の植物は花の特殊な形に特徴があります。シソ科の花は合弁花ごうべんかです。合弁花とは、花弁ごうべんかの端ゆごうが癒合して、筒状になっている花です。例えばアサガオやキキョウの花も合弁花ごうべんかです。これに対し、サクラやナデシコのように花弁が1枚ずつ離れている花を離弁花りべんかといいます。シソ科の花は合弁花ごうべんかですが、一部の例外を除き通常先端が上下に裂け、唇のような形になります。花の上の唇状の部分を上唇じょうしん、下の唇状の部分を下唇かしんと呼びます。このような特徴から、以前、シソ科はシンケイ科(唇形科)と呼ばれていました。シソ科のほとんどは草本そうほん(草)ですが、ムラサキシキブのように小低木になるものもあります。

シソ科の植物のいくつかはすでに説明や写真を本連載コラムのバックナンバーに載せていますが、それらも含めてみずき野やその周辺のシソ科植物について、総括してみたいと思います。それぞれの種しゅは、開花の季節順に述べることにしました。春から秋までいろいろなシソ科植物が咲きます。それぞれの季節に、シソ科植物を見つけたら、ここに載せた記事を参照してください。

## 1 ヒメオドリコソウ

ヒメオドリコソウは次に述べるホトケノザとともにオドリコソウの仲間(オドリコソウ属)です。オドリコソウ自体は日本全土に分布し、比較的普通に見られる植物ですが、みずき野周辺では見たことがありません。ヒメオドリコソウについては、ホトケノザとともに[第11回「春の野の草花」](#)にも載せています。

オドリコソウ属の学名はラミウム(Lamium)といます。語源はギリシャ語ラモス(Lamos、喉のどのこと)に由来するという説と、ギリシャ神話のラミア(Lamia)に由来するとする説があります。ラミアは上半身が女体、下半身がへびの怪物で、人を食い子供の血を吸うとされています。両方とも花の形をなぞらえたものですが、どちらもオドリコソウ属の可憐かれんな花にふさわしいとは思えません。オドリコソウという和名は笠をかぶって輪舞する踊り子の姿を連想させ、優雅で可憐かれんな感じの素敵な名です。日本全土に普通に見られるオドリコソウがみずき野や周辺に見られないのは残念なことです。



ヒメオドリコソウ

3月下旬 守谷市本町地区

ヒメオドリコソウは高さ10~25センチほどの小さな越年草で、2月下旬頃から5月頃まで花を咲かせます。葉は茎に密につき、花は葉の付け根から横向きに咲きます。オドリコソウの名は、花の形を踊り子の姿になぞらえたものですが、ヒメオドリコソウはオドリコソウに似ているが小さいので、ヒメオドリコソウと名付けられました。ヒメオドリコソウはヨーロッパ原産で、明治の中頃に日本に入ったとされています。

ヒメオドリコソウの花の色や葉の色にはいくつかの変異が見られます。それについては[第48回「野草の花の色と模様の変異」](#)で述べています。

## 2 ホトケノザ

ホトケノザは、庭や道ばたや畑に最も普通に見られる越年草です。花は早春から晩春にかけて、よく咲きますが、真夏にも見かけることがあります。高さ10~30センチ程の小さな植物で、茎の下部の葉には柄えがありますが、上部の葉には柄えがなく、2枚対になって茎に付きます。花は葉の付け根に数個、斜め上向きに咲きます。ホトケノザという名は、葉の形を仏様が座っている台座になぞらえたものです。英語ではヘンビット(henbit)といますが語源は不明です。ホトケノザはアジア、ヨーロッパ、北アフリカの分布し、北アメリカにも帰化しています。



ホトケノザ 4月上旬 守谷市本町地区

なお、春の七草のひとつであるホトケノザはキク科の植物で、正式の和名をコオニタビラコといい、シソ科のホトケノザとは無縁です。

## 3 ジュウニヒトエ

ジュウニヒトエは主として明るい林の中に生える日本固有の多年草で、花は3月下旬から6月頃まで見られます。ジュウニヒトエは[第32回「春の野の草花\(2\)」](#)ですでに紹介しています。その時の記事に添えた写真は本町地区で撮ったものですが、ここではみずき野からはかなり離れた守谷市大山新田地区で撮った写真を載せておきます。ジュウニヒトエはみずき野周辺

には少ないように思いますが、ここではジュウニヒトエがかなり多数生えていました。ジュウニヒトエの花は白地に青い筋があり、重なり合って咲きます。ジュウニヒトエの名は、花の重なりを女官の十二単じゅうにひとえになぞえたものです。



ジュウニヒトエ  
4月上旬 守谷市大山新田地区

#### 4 コバノタツナミ

コバノタツナミは4~6月頃、茎の先端に花の穂をつけ、ピンクの花を咲かせます。海岸近くに多い植物ですが、その他の地域では、庭でよく栽培されます。このため次回に予定しているシソ科の栽培種の記事の中で述べるべきかと思いましたが、みずき野の文化財公園に自生しているものを見つけたので、一応野生種として今回載せました。ただし、これも栽培されているものの種子がこの場所に運ばれて発芽した可能性が大いにあります。

コバノタツナミはタツナミソウと同種ですが、別品種として区別されています。コバノタツナミは小さく、高さ5~20センチ位、タツナミソウはそれより大きく、20~40センチ程です。また、コバノタツナミの葉は長さ1センチ内外、タツナミソウは3センチ位あります。タツナミソウはみずき野町内や周辺で見たことがありませんが、守谷の植物のリストには入っています(『もりやの自然誌』2000年・守谷町教育委員会発行)。タツナミソウは漢字では「立浪草」と書き、花の形が波頭はとうに見えることから付けられた名です。コバノタツナミの花の形もタツナミソウと同様です。



コバノタツナミ(スケッチ)  
4月下旬 わが家の庭から採取

コバノタツナミは写真に撮っていなかったもので、スケッチを載せておきます。ただし、わが家の庭で咲いていたものです。

## 5 カキドオシ

カキドオシについては、[第32回「春の野の草花\(2\)」](#)で簡単に紹介していますが、ここにも載せておきます。

カキドオシの仲間(カキドオシ属)の植物は、国外では何種かあるようですが、日本ではカキドオシの1種のみが分布しています。カキドオシは農道の道ばたなどによく見られる多年草で、葉は円形で、縁に切れ込みがあり、4~5月に、濃い紫色の斑点をもつ淡紫色の花を咲かせます。花の時期には茎が直立していますが、花が終わると茎は伸びて地を這うように生長し、長いつるになります。つるが垣根を通して庭に進入することからカキドオシ(垣通し)の名がついたものと考えられています。



カキドオシ  
5月中旬 守谷市本町地区

カキドオシは日本を含む東アジアに分布する植物ですが、ヨーロッパにはセイヨウカキドウシというカキドウシの<sup>あしゅ</sup>亜種があり、花はカキドオシより多少小さいですが、ほかはカキドオシとほとんど変わらないようです。<sup>あしゅ</sup>亜種とは、種は同じであるけれど、わずかに形態上の違いがあるものをいいます。同じ種でも生息する地域が離れていると、多少の違いが生じ、<sup>あしゅ</sup>亜種となることが多いようです。セイヨウカキドオシは葉の形や地面を這う性質から、グランドアイビー(地面を這うアイビーの意)と呼ばれています。

## 6 ミゾコウジュ

ミゾコウジュは比較的湿った場所に生える越年草です。高さは50センチ前後。花は淡い紫で、5~6月頃に開きます。現在は全国的に数が減って、環境省により準絶滅危惧種に指定されています。みずき野の第2調整池は適度に湿ったミゾコウジュの適地ですが、第2調整池の草は最近よく刈り取られるせいか、ここでも数を減らしているように感じます。越年草ですから、種子ができる前に刈り取られると、生存するすべがなくなります。ミゾコウジュはアジアやオーストラリアに広く分布しています。



ミゾコウジュの外観(左)と花  
5月下旬 みずき野第2調整池

## 7 トウバナ

トウバナは水田のへりなどの明るい湿地によく見られる多年草です。トウバナは 5~8月頃、薄いピンクの花を咲かせます。花の穂にはそのふしぶしに柄<sup>え</sup>のついた花が10数個、放射状に付き、その形が仏塔を連想させ、トウバナの名の由来になっています。トウバナはアジアに広く分布しています。

トウバナによく似た種<sup>しゆ</sup>にイヌトウバナがあり、後述します。トウバナとイヌトウバナの違いについては、「13 イヌトウバナ」の項を参照してください。



トウバナの外観(左)と花  
6月中旬 守谷市本町地区

## 8 ムラサキシキブ

ムラサキシキブは林などに自生する3メートル程の落葉低木で、紫色の美しい実がなり、紫式部を連想させ、その名が付けられたものと思われます。週刊朝日百科「世界の植物」15号には、「このような文学的な名前は山の人たちに親しみはなく、おそらく京都の本草家か風流人が名付け親ではなかろうか」と推測しています。ムラサキシキブは東アジア温帯に分布しています。実の写真は、[第19回「木の実いろいろ\(1\)」](#)に載せていますので、参照してください。



ムラサキシキブ 6月中旬 守谷市本町地区

ムラサキシキブは以前、クマツヅラ科の植物とされていましたが、思いもかけず、最新の植物の分類体系 (APG 分類体系:DNA 配列による分類) でシソ科に編入されました。花は唇形ではなく、均等に4つに裂けています。

## 9 ウツボグサ

ウツボグサは日当たりのよい草原に生える多年草です。花は紫色で、6~8月頃花穂かすい(花をつける穂状のもの)をつけます。花は花穂かすいの周辺に咲きます。ウツボグサの名は、花穂を鞞うつぼに



ウツボグサの外観(左)と花 6月下旬 取手市貝塚地区

なぞらえたもの。鞞<sup>うつぼ</sup>とは矢を入れて腰につける筒状の籠<sup>かご</sup>です。ウツボグサは東アジアの寒帯から温帯に分布しています。

## 10 メハジキ

メハジキは道ばたに生える越年草で、50～100センチになります。葉は3つに裂け、ヨモギの葉を細くしたような感じで茎につきます。花はピンクで小さく、葉の根元につきます。東アジアの温帯から熱帯に分布する植物です。



メハジキ 7月中旬 守谷市城址公園

メハジキはひと目でよくわかる植物ですが、みずき野周辺にはごく少ないようです。私自身は、取手市上高井地区と守谷市の城址公園で見ただけです。子供がメハジキの茎を短く切って折り曲げ、まぶたに張って目を開かせて遊んだことがその名の由来になっているそうです。かなり危険な遊びに思えますが、子供の遊びに使われたくらいですから、以前はたくさん生えていたのでしょう。

## 11 イヌゴマ

イヌゴマは水田のへりなどの湿地に生える多年草です。花は薄いピンクですが、濃いピンクの斑点があります。茎には下向きの小さな棘<sup>とげ</sup>があり、茎の横断面は四辺形です。北海道から九



イヌゴマ 7月下旬 取手市市之台地区



(参考)ゴマ(ゴマ科)9月中旬 取手市貝塚地区



州まで分布する日本固有種です。なお、イヌゴマについては、[第36回「水田と湿地の植物\(2\)」](#)にも載せています。

イヌゴマという名は役に立たないゴマに似た植物という意味とと思われますが、イヌゴマはシソ科、ゴマはゴマ科ですから、近縁ではありません。イヌゴマは高さ50センチ前後ですが、ゴマは1メートル以上になります。参考のため、ゴマの花と葉が写っている写真も載せておきました。大きさは全く違いますが、花や葉のつき方は多少似ているでしょうか。

## 12 ニガクサ

ニガクサも湿り気のある土地に生える多年草です。高さは60センチ前後。花は薄いピンクですが、濃いピンクの帯と斑点があります。ニガクサは日本列島と朝鮮半島に分布しています。

ニガクサの名は「苦い草」の意と思われますが、牧野富太郎の記述や、ウェブ上の多くのサイトでは、苦くないと書いてあります。苦くない草がなぜニガクサなのか。[国立科学博物館附属教育園のサイト](#)の「見ごろ情報 2012年7月11日」の記事には、ニガクサの名は苦い草の意だが苦みはなく、風邪に効く薬草としての効果からついたのだらうと述べられています。



ニガクサの外観(左)と花  
7月中旬 本町地区

## 13 イヌトウバナ

イヌトウバナは前述のトウバナとよく似た多年草ですが、トウバナは水田のへりなどの湿った明るい場所に生え、イヌトウバナは、林の中やへりなどの比較的渴いた土地に生えます。イヌトウバナは北海道、本州、四国、九州に分布する日本固有種です。トウバナと同様、イヌトウバナも花の茎への付き方は仏塔を連想させます。

イヌトウバナはトウバナとは花の咲く時期や生育場所が違っているのですが、判別を間違えることはないと思いますが、決定的な違いはイヌトウバナの葉の裏側には腺体せんたい(匂う物質などを含む小さな丸い粒状のもの)があり、トウバナの葉には腺体せんたいがないことです。

イヌトウバナは「役に立たないトウバナ」という意味ですが、「イヌ」のつく理由ははっきりしません。まったくの推測ですが、トウバナは薬草とされており、イヌトウバナは薬草ではないことが、「イヌ」がついた理由ではないかと思えます。



イヌトウバナの外観(左)と花 8月下旬 守谷市本町地区



イヌトウバナの葉の裏  
粒状に見えるものが腺体  
(トウバナの葉にはない)

## 14 アキノタムラソウ

アキノタムラソウは山野に多い多年草です。高さは50~70センチ位で、アキノタムラソウという名がついていますが、実際は7月頃から咲き始めます。花期は長く、11月頃まで見られます。



アキノタムラソウの外観(左)と花 8月上旬 守谷市城址公園

花色は淡い青、ないしはピンクです。分布は東アジア温帯。この写真は守谷市の城址公園で撮ったものですが、みずき野文化財公園でも見かけたことがあります。近縁種にナツノタムラソウがありますが、東海から近畿に分布しており、みずき野周辺では見られません。なお、アキノタムラソウについては、[第17回「秋の野の花」](#)にも載せています。

## 15 ハッカ

ハッカは湿りけのある土地に生える多年草です。花は薄いピンクで舌状花ぜつじょうかではなく、等分に4裂していますが、舌状花ぜつじょうかの変形もかもしれませかん。葉は揉んで嗅ぐと強烈なミント(メントール)の香りがします。ハッカは東アジアの寒帯から温帯に分布しています。

なお、ハッカとメントールについては、[第36回「水田と湿地の植物\(2\)」](#)でかなり詳しく述べていますので、参照してください。



ハッカの外観(左)と花 8月下旬 守谷市本町地区

## 16 ヒメジソ

ヒメジソは農道のへりなどに普通に見られる一年草です。高さは40~50センチ位で、9~10月頃、淡いピンクの花を咲かせます。葉の形や花穂かすいの形はシソによく似ていますが、高さはシソの半分位しかありません。ヒメジソはアジアに広く分布しています。



ヒメジソの外観(左)と花 9月下旬 取手市市之台地区

## 17 イヌコウジュ

イヌコウジュは、草原に普通に見られる一年草です。家の庭にも侵入してくることがあります。花は淡いピンクで、9~10月頃開花します。ごく普通の植物なのですが、写真を撮っていなかったもので、代わりに以前に画いたスケッチを載せておきます。イヌコウジュの名は役に立たないコウジュという意味です。

ちなみに、コウジュとは「香蒿」と書き、通常ナギナタコウジュの草全体を乾燥したもので、生薬として利尿や解熱に使われます。ナギナタコウジュは10月頃、<sup>なぎなた</sup>薙刀のように反り返った穂の片側に花をつけるシソ科の一年草です。守谷市立愛宕中学校付近で一度見たことがあります、それ以来見ていません。写真も残念ながら撮っていませんでした。

イヌコウジュ(スケッチ)  
10月上旬 わが家の庭で採取

## 18 エゴマ

エゴマは高さ50センチ内外の一年草です。その名からゴマの仲間と思われがちですが、ゴマとは類縁関係がなく、シソと同種の植物で、シソとは品種の違いしかありません。したがって、外観はシソにそっくりです。大きな違いは、人にとってシソには食欲を誘う香りがありますが、エゴマは不快な臭いがします。ただし、実からは、生活習慣病を改善するといわれる「エゴマ油」が採れます。このため、エゴマは栽培植物としても重要です。エゴマはインドと中国に原産し、日本へは8世紀頃中国から渡来したとされています。

エゴマはみずき野周辺では、かつて一度だけ第2調整池の東隣接地で見ただけです。写真は撮っていませんので、スケッチを載せておきます。



エゴマ(スケッチ)  
10月上旬 第2調整池で採取

## 19 ヤマハッカ

ヤマハッカは9~10月頃、道ばたによく見かける多年草です。「ハッカ」と名がついていますが、外観はハッカと全く違ってきます。高さは50~90センチほど。東アジア一帯に分布してい



ヤマハッカの外観(スケッチ)と花  
10月中旬 守谷市立沢地区で採取

ます。花色は淡い青ないしピンクです。写真はすでに[第17回「秋の野の花」](#)に載せたものしかなかったため、守谷市高野地区で採取したヤマハッカの外観をスケッチで示します。また、花と花穂かすいの形を示すため、「第17回」に載せた写真を少しトリミングして載せておきます。

## 追記

みずき野周辺の植物観察を始めた頃、第2調整池でシソ科のシロネを見つけたことがあります。その後は全く見ていません。残念ながら、絶えてしまったと思われます。

シソ科の野生種の多くは小さな花を咲かせ、野外でもほとんど目立ちません。そのためか、歌や俳句よに詠み込まれている植物は見当たりませんでした。どれも人から見れば、控えめすぎる植物たちです。しかし、シソ科の花は、もちろん人に気に入られるために咲いているわけではありません。唇のような、普通の花とは異なる形は多分昆虫を呼び寄せ、また止まるのに適した形なのだろうと思います。昆虫は狭い花の筒に入り込んで蜜を求め、その間に昆虫の体には花粉がたくさんつき、他の花への花粉の伝搬が効率よく行われます。シソ科の植物は芳香を放つものが多く、これもまた昆虫を誘う手段かもしれません。